

## 創立 20 周年を迎えて

—会長あいさつ—

小林 宏 治



1960年(昭和35年)4月、情報処理に関する学問技術の進歩向上と普及を図る代表的団体として発足した情報処理学会は、各界のご援助のもとに順調に発展し、ここに創立20周年の記念すべき日を迎えるに至りました。

顧みますと、1950年代後半に於ける我が国の情報処理界は、先進諸国、特にアメリカに於ける急速な発展に刺激されて、情報処理機械としてのコンピュータとその応用方法の開発が強く叫ばれ、関心が非常に高まっていたものの、いまだ現実的な開発の方向付けをなすには至らず、主として各所に実験的な導入が試みられているという状態でありました。1960年度に於ける我が国の“電子計算機および関連装置”の生産額は、通産省の機械統計年報によれば、わずか25億円に過ぎませんでした\*。

しかしながら、当時、欧米先進国では続々とComputer SocietyやInformation Processing Societyなどが設立され活躍を開始しつつあったのであります。

1959年6月、パリに於いてユネスコ主催により「情報処理に関する第1回国際会議」が開催され、情報処理に関する国際学術振興連合体の設立が討議されて、その結果1960年1月1日に、ブラッセルに本部を置く「国際情報処理学会連合\*\* (International Federation of Information Processing Societies: IFIPS)」が発足したのであります。

日本は、ローマに設立された「国際計数センター(ICC)」に関する国際条約を、いち早く批准して以来、情報処理分野の国際協調に努めて来ていたのですが、新生IFIPSも日本の参加を強く望んでおりました。そこで国内の関係各層の有志代表が集まって討議した結果、情報処理に関する学問技術の高度化のための国

内問題としても、またIFIPSの規約\*\*\*に照らしても、この際、我が国に新しい情報処理に関する独立の学会を設立することが必要であるとの結論を得たのであります。

かかる経過から1960年6月に開催を予告されたIFIPSの第1回総会に参加することを予定して、“社団法人情報処理学会”を設立\*\*\*\*することとして同4月22日に創立総会を開催、同時に学会活動が開始されたのであります。初代会長には東京大学山下英男教授が就任されました。

爾来20年、9代に及ぶ歴代会長の真に適切なお指導のもとに、当学会は生々発展を遂げて参りました。

発足当時の会員数353名は約40倍の13,821名(昭和54年度末日現在)となり、この間に、会誌「情報処理」は通算178冊、約14,600頁が、英文誌は8冊、約500頁が、また本誌と分離された論文誌は6冊、約550頁が発行されております。これらの会誌によって発表された論文数は、邦文663件、英文351件でありました。

予算規模はこの20年間に約60倍となり、それだけ学会活動の範囲が拡がってきていることを示しております。

恒例の全国大会は20回開催され、会する者総計約14,000名、3,685件の研究成果が発表されました。

研究会活動については、すでに完了した研究が20件、継続研究が12件、研究委員会活動は6件であります。完了した研究成果は、それぞれの研究活動報告書にまとめられているほか学術図書として刊行され、また三度にわたって改訂発行された「情報処理ハンドブック」の貴重な資料などとなって斯界発展のために貢献いたしております。

情報処理科学の普及講演会、シンポジウム、関連技術の説明会などは他学会との共催・協賛を含め全国各地で、すでに約150回開催され、多大の成果を収めたものと考えられております。

当学会はまた、IFIP国内委員会を常置してIFIP活

\* 1978年度は9,102億円。

\*\* 現名称「情報処理国際連合(International Federation for Information Processing)」。

\*\*\* IFIPSはその規約において、IFIPSに参加し得る学会は、その国を代表する唯一の機関に限ることを明示しております。

\*\*\*\* 当学会に対する「社団法人」の文部省許可は昭和38年12月17日。

動を審議支援し、7回に及ぶ IFIP 世界コンピュータ会議に参加して国際協力の一翼を担っております。

さらに学会は第1回、第2回の日米コンピュータ会議の開催国機関として活躍し、第3回同会議を共催して両国コンピュータ技術の交流と発展に力を尽しました。

なお、IFIP の第8回世界コンピュータ会議は本年10月、東京およびメルボルンに於いて開催されることは、すでにご承知の通りであります。このことは、本学会が IFIP の中において一方の重鎮をなす証左とも言えましょう。それだけに、その成功に対して皆様方のご協力を切望して止みません。

このように本学会の20年間の成果は、まことに見るべきものがありますが、その過程は決して平坦ではありませんでした。揺籃期の学会にありがちな、発展方向についての認識の混乱や、経済的な困難などもなかったわけではありません。しかし、その都度それらの問題点を克服し乗り越えて、今日に至ったわけでありす。

これはひとえに、歴代会長を始め各副会長、学会役員、会員各位ならびに事務局職員の方々の良識、学会を盛り立てようとする熱意と不断のご協力の賜であり、ここに改めて深く敬意と感謝の意を表する次第であります。

ここで更に目を将来に転ずれば、学会の前途は学術上の発展に満ち、多彩であると同時に峻険でもあろうかと存するのであります。

今日、社会活動の各分野に情報処理の学問・技術が浸透し、社会の効率的な発展を支えていることは言うまでもありませんが、更にこれを推進し一層の高度化を図るために、社会各層が情報処理科学の進展に期待している所は、まことに大であります。この進展のためには、学術・産業・利用の各分野が良きバランスを保ち、互いに他を刺激しながら向上して行くことが必要であります。本学会の会員は、まさに上記各分野の優秀を網羅しており、最も効果的に斯学の情報が交流し得るような構成となっております。そこで学会は、この構成を崩すことなく発展せしめ、その研究成果を積極的に世に問うて、社会各層の期待に応え、責務を全うしなければならないと信ずるのであります。

今後の学会活動に於いて取扱われるべき課題は山積しているのですが、ここで、その中の幾つかを指摘しておきたいと存じます。

その第1は、情報処理科学の基礎となり、将来に重

大な影響を与え、発展性のあるハードウェア、ソフトウェア、応用技術、システム技術、資源共用技術（データベース・ネットワークなど）、各種技術の標準化等についての研究の一層の推進と、その成果を広く周知普及を図ることあります。その際、研究テーマの捉え方、研究態勢、普及活動の方法などについては、広い視野から重点を絞り、活発化し、効率化を図る工夫が必要だと存じます。

第2は、迫り来るソフトウェアの危機に対処する基本的方策を、学会の認知を挙げて討議し樹立することあります。ソフトウェアは人の知的生産物でありますから、現在の人手による煉瓦積みにも似た生産方法によっている限り、早晚、人的ネックによる危機に逢着することは必至であります。これを回避することは斯界の重大事であります。そのために学会は、事態の解明、幾つか提案されている対処方法の正しい評価、さらにその発展の促進、他の対策案の開発等を長期的展望に立って、総合的に、しかも開発の節々に期間を定めて、段階的に推進すべきであります。

第3は、マン・マシン・インタフェースの一層の重視であります。現在、情報処理システムの内部に於いて情報を処理する技術は、かなり高度化されたと言えますが、これに比較して、入出力部分の技術には、なお一段と努力し開発を促進しなければならない所があります。文字、音声、図形、画像など広義のパターン認識の理論・技術の開発は、システム運用者の負荷を軽減するのみならず、システムを更に高度化するために是非とも必要なことあります。

第4には、国際協調の強化が挙げられます。学会はこれからも、世界に通用する学術を確立するために、国際交流を一層、活発にする必要があります。第8回世界コンピュータ会議はその好個の機会であります。

学会の将来にとって、力強い支柱となるものは会員層の拡大、特に若い年代の会員の増加であります。そのためには、若い諸君に親しみ易く、しかも学術的に高度で品位のある学会活動の不断の実施が、その基本条件であります。

既に述べましたように、斯界の進歩発展は急速であり、本学会の取扱う範囲は拡大の一途を辿っております。我が国の情報処理界に大きな足跡を残した当学会の、過去20年間の業績を思い、多彩にして輝かしい将来を希望して、学会の益々の発展を切望する次第であります。